



大館在住の映画評論家

何につけ新しいものに惹かれることが少なくなってきた自分を感じますが、それじゃいかんと思われました。音楽の話。図書館の事務を執る S さんが最近大のお気に入りと言うのが、竹原ピストル。なんじゃそりゃ、という名前ですが、聴いてみるとこれが実にいい。好奇心やひとの勧めるものへの関心を失ってはいけませんね。「自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」という茨木のり子の詩の一節が頭をよぎりました。

竹原ピストルには「最後の一手～聖（さとし）の青春～」という曲もありました。興味のない将棋の世界ということで敬遠していた大崎善生のデビュー作『聖の青春』（講談社、2000年、中央BM団貸・比内・田代で所蔵）を、ぜひ読まなくちゃ。

❖困っています

切り取り、抜き取り、持ち去り、書き込み……。全国の図書館が困っている心無い利用者による図書館資料に対する仕打ちです。このコラムで以前にも書いたことですが、残念なことに中央図書館でも最近目立っています。

新聞は、地元紙については永年保存しています。大正年間創業の北鹿新聞がすべて揃っているわけではありませんが、何度も大火に見舞われた大館ですから、図書館だけにしかない号もたくさんあります。地元紙以外はスペースの制約もあるのでさすがに永年保存は無理ですが、それぞれ決められた年限に従って大事に保存しています。雑誌も、期限つきではありますが県内の図書館で分担保存を行っています。図書その他も含めて図書館資料は、市立図書館利用者だけでなく場合によっては世界中の人の利用に備えているのです。その意味で図書館資料は市民の財産であることはもとより、人類の財産とも言えるのです。

そのため、切り抜きや抜き取りなどがあると原状復帰を図るために、場合によっては多くの労力を割かれることとなります。新聞でいえば、地元の販売店にまだ残紙がある場合は比較的簡単に済みます（もっとも販売店には忙しい中迷惑をお掛けすることになります）が、ない場合は支局や総局、本社などに連絡して送ってもらうなど結構な手間と時間がかかります。先日は同じ新聞社にそれほど間を置かず送付をお願いしたら、「最近多いですね」と嫌味を言われました。向こうの迷惑もわかるので、こちらはすみませんとしか言えません。

ところでこういった悪さをする人は、図書館が複写（コピー）サービスを行っていることをご存知なのでしょうか。白黒だと1枚10円でコピーできます。新聞や雑誌などの逐次刊行物は、著作権法に基づくガイドラインに沿った制約のもとで複写可能です。切り取りや抜き取りをしようかなとか、クロスワードに書き込みたいと

思った人はぜひご利用ください。それが嫌なら、お願いですから書店などでお買い求めください。

ここまでお読みいただいた方の中には、監視を強めるとかすればいいのにと考えた方もいらっしゃるでしょう。まったくそうですが、限られた予算と人員の中では、怪しいそぶりの人がいるとしても残念ながら100%監視することは不可能です。巡回の頻度を高めるよう努めていますが、効果は限定的です。たとえ監視カメラを設置しても状況はそれほど変わらないでしょう。ある程度の抑止効果は期待できるかもしれませんが。

公共図書館は基本的に性善説に立って運営されています。そのことの意味を来館するすべての人に理解してもらいたいと願ってやみません。

❁ 地方在住の映画評論家

前回（1月27日）の当コラムは、小松幸（おさむ）さんの大衆文学研究賞の受賞報告と並んでの掲載でした。小松さんには市立図書館主催の大館市読書感想文コンクールの審査員を長く務めていただいた経緯があります。公平で的確な判断と温和で平静な話しぶりで、人間的にも魅力のある方だと尊敬しているので、図書館としてもたいへん喜んでいきます。

数多い映画評論の中で個人的には小林信彦と和田誠に傾倒してきましたが、地方在住で映画評論を出版する方もいます。代表格は愛知県在住の森卓也でしょうか。森氏の場合アニメ映画から寄席芸能まで守備範囲が広いので目立っています。大館在住の小松さんの場合、『剣光一闪』にしる今回の『忠臣蔵映画と日本人』（いずれも森話社刊、2013年・2015年、中央図書館蔵）にしる、正直現代では隆盛とは言えない時代劇を深く掘り下げたものだけに、今回の受賞で脚光を浴びたことは嬉しい限りです。

受賞をきっかけに執筆依頼も増えることと思いますが、どうかたくさん書いて、できれば幅も広げていただいて、市民を喜ばせてください。僭越ながら期待しております。（陽）